

氏名	河野 真理江
学位の種類	博士(映像身体学)
報告番号	甲第421号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	戦後日本「メロドラマ映画」の身体 ——撮影所時代のローカル・ジャンルと範例的作品
審査委員	(主査) 中村 秀之 田崎 英明 石川 巧(立教大学大学院文学研究科日本文学専攻教授) 木下 千花(首都大学東京大学院人文科学研究科文化基礎論専攻准教授)

# I. 論文の内容の要旨

## (1) 論文の構成

本論文は、本文に付録と参考文献目録を加えた全 135 頁 (約 169,000 字) から成っている。

### 序論 「メロドラマ (merodorama)」再考

はじめに

1. ローカル・ジャンル
2. プロトタイプ
3. 範例的作品

おわりに

### 第1章 すれ違い映画——戦後日本における「メロドラマ」と大衆文化

はじめに

1. 『君の名は』の「模造品」たち
2. 映画・ラジオ・週刊誌の連携
3. ロマンティックな帝国、植民地としての異国
4. 階級論争から「通俗」言説へ

おわりに

### 第2章 『君の名は』三部作 (1953~1954 年) ——欲望と道德の感傷メロドラマ

はじめに

1. 結びつきの絶対的宙吊りとしての「すれ違い」
2. 「倒れること」と「待つこと」
3. 夢と現実のパラドクス
4. 「虚脱」という現実

おわりに

### 第3章 文芸メロドラマ——「よろめき」の女性映画群

はじめに

1. 中間小説と文芸映画
2. 松竹女性映画の変容
3. モラル・パニックと男性観客性
4. 『妻は告白する』(1961 年)

おわりに

#### 第4章 『猟銃』(1961年) ——権力と背信の「洗練された」メロドラマ

はじめに

1. 権力の表象と主題化
2. 「壺」と「銃」
3. イデオロギー的矛盾と批評言説

おわりに

#### 第5章 リバイバル・メロドラマ——「メロドラマ」の復活と死

はじめに

1. 「メロドラマ」復活の波
2. リバイバル・メロドラマは二度死ぬ
3. ゴシップの快樂

おわりに

#### 第6章 『続・愛染かつら』(1962年)

——自己言及的でグロテスクなバックステージ・メロドラマ

はじめに

1. 再現と「アップデート」
2. バックステージ・メロドラマとして読む
3. アイロニーとしての自己言及性
4. グロテスクな「過剰」、あるいは死としての再生

おわりに

#### 結論 メロドラマ映画の身体

はじめに

1. ジャンル・ボディー
2. 映画のなかの人のからだ
3. テクスチャーと肌理

おわりに

#### 付録 各サブジャンルの作品一覧

1. すれ違い映画一覧
2. 文芸メロドラマ一覧
3. リバイバル・メロドラマ一覧

## 参考文献目錄

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、日本映画史における「メロドラマ」の形態を実証的かつ理論的に再検証することを目的としている。ここで括弧付きで語られる「メロドラマ」とは、日本映画の歴史のなかで、同時代的に「メロドラマ」と呼ばれていた批評的・産業的カテゴリーを指す。とくに 1930 年代から 60 年代を中心に一定期間存在していた日本映画独自のジャンルとしての「メロドラマ」とそのサブジャンルを同定し、主題、技法とスタイル、スターと観客性、批評言説と大衆的受容等にかんする諸特徴を明らかにした。方法としては、映画ジャンル研究、映画史研究を基本的な立場としつつ、女性映画研究、受容理論、大衆文化論、ジェンダー&セクシュアリティ研究といった多角的な視点から、映画言説の歴史的検証と映画作品のテキスト分析によるケース・スタディを行った。

序論では、本論文における「メロドラマ」というジャンルの捉え方を理解するうえで基礎となる、「ローカル・ジャンル」、「プロトタイプ」、「範例的作品」という 3つの概念について説明した。まず、ローカル・ジャンルという概念は、映画におけるメロドラマがつねに歴史的・文化的な特殊性においてあらわれるという考えを反映するものである。従来の映画研究において、メロドラマはもっぱら普遍的あるいは標準的な解釈を追究されてきた分野であるのに対して、本論文ではこうした既存の解釈と、日本映画における同時代的なジャンルとしての「メロドラマ」とが、歴史的・地域的に特殊であるという意味においては等しくローカルな形態であるとみなした。プロトタイプという概念は、日本映画のなかで最初に「メロドラマ」として広く一般に受容された映画群、とりわけ 1930 年代の松竹女性映画を指示して用いた。プロトタイプを設定することは、その後日本映画のなかでこのジャンルがどのように多様化したかを辿るのに役立つ。範例的作品という概念は、先述したような異なるローカルなメロドラマ概念の特徴を併せ持つ作品のことを指し、異なる背景を持つメロドラマの意味と用法、あるいはその形態をめぐる不一致と相似、典型と例外、個別性と個別性とを関連づけることができる。

本論では、こうした「メロドラマ」の特質をより具体的に明らかにするために、占領終結後のほぼ同時期に展開された 3つのローカル・ジャンルに注目した。

第一は「すれ違い映画」と呼ばれていた作品群で、これは『君の名は』に代表される、運命の出会いと別れを延々とくり返す大作恋愛映画を指す。同時代における最もポピュラーなメロドラマのタイプでもある。

第二は「文芸メロドラマ」と呼ばれていた作品群で、これは、昭和 30 年代を中心とするいわゆる「姦通小説」の映画化作品群と要約できる。

第三は「リバイバルもの」と呼ばれることがあった作品群である。1950 年代から 1960 年代にかけて、かつての映画作品の再映画化が各社で盛んになるが、これはそのなかでも、1920 年代から 1930 年代に「メロドラマ」「新派悲劇」「女性映画」と呼ばれていた映画を再映画化した際に「メロドラマ」と一括して宣伝・批評された作品群を指す。

この3つのジャンルにかんして、ジャンルの映画史的な位置や歴史的コンテクスト、受容の過程や作品の傾向等について、それぞれ1つの章を設けて概説的に論じた。このとき、すれ違い映画においては、敗戦後の日本における帝国主義への郷愁や、芸術と大衆をめぐる批評的論争が重要な論点となった。また、文芸メロドラマにおいて鍵となるのは、同時代における姦通を主題とした中間小説との関係と、作品に対するモラル・パニック的な男性批評家たちの反応であった。リバイバル・メロドラマにおいては、物語世界以外の情報を搾取することによって成り立つ鑑賞の態度、具体的にはテキスト上でゴシップ的な快樂がいかに追求されようとしていたのかが問題となった。

さらに各ジャンルのなかから、地域言語的な「メロドラマ」の形態を持ちながら、よりグローバルなメロドラマ研究における主題や様式と関連性を持つ範例的作品を1つずつ抽出し、ケース・スタディとして、その作品分析を行う1章をそれぞれ設けた。すれ違い映画からは『君の名は』三部作(1953年～1954年)を、文芸メロドラマからは『猟銃』(1961年)を、リバイバル・メロドラマからは『続・愛染かつら』(1962年)を取り上げる。各作品を分析する際に鍵としたのは、これらの映画のなかでメロドラマ的葛藤を構成していたものが何であったか、という共通の問いであった。すなわち、『君の名は』のなかで、宙吊りや、マゾヒズム、逆説というつねに倒錯した様態であられるそれは、敗戦後の日本国民のメンタリティーと結びついていた。『猟銃』においてきわめて洗練されたスタイルを通じて示されるそれは、性と権力をめぐるジェンダー・イデオロギーに対する女性的身体の抵抗をあらわしている。そして、『続・愛染かつら』においては、このような葛藤は、物語のなかではヒロインのアイデンティティをめぐる虚と実の拮抗というかたちをとりつつ、ジャンルそれ自体にたいする自己言及的な態度を外面化させていたのである。

結論では、「メロドラマ」映画の「身体性」について3つの視点から総括的な考察を加えた。すなわち、第一に、スタジオ・システムのなかで構築され、大衆に広く浸透することで、ひとつの「からだ」としてのまとまりを持っていたこのジャンルの有り様(ジャンル・ボディー)について、第二に古典的で通俗的だという批判を免れなかった各作品のなかでそのような物語にあらがう存在でありえた俳優の生身の身体について、そして第三には、1950年代から1960年代の間に生まれたこれらのメロドラマのジャンル映画が、どのようなテクスチャーと肌理を持っているかについて、メロドラマというジャンルが持つ歴史的特殊性と普遍性の問題をあらためて問い直しつつ議論した。

最終的には、従来のフィルム・スタディーズや日本映画にかんする批評言説の「メロドラマ」に対する態度を批判的に省みつつ、今後の映画ジャンル研究が、本論文で扱ったようなローカルな形態としてのメロドラマをいっそう追求していくことの意義を訴えて、論を閉じた。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本申請論文が論じるメロドラマは、映画研究にとって格別に重要な意味を持つ対象である。そもそも 1970 年代の英語圏で、人文学の新領域としての映画研究 (film studies) を創成する主動因となったのは、低俗で安っぽい大衆娯楽として蔑まれてきたメロドラマを真摯な考察の対象として取り上げ、その芸術的特性、政治的機能、文化的意義などを解明した一連の研究だった。ただし、このような価値評価の転換は、メロドラマというジャンルに歴史的意味とは異なる独自の批評的定義を与えて「ファミリー・メロドラマ」や「女性映画」などの新たな研究対象を措定することによって達成された。いわば学術的標準版と言えるこの批評的メロドラマ概念は、当初は 1950 年代ハリウッド映画の特定の作品をモデルとして作られたものだが、次第に、他の時代、異なる国や地域の映画にも適用されるようになり、日本映画もその例外ではなかった。

それに対して本論文は、先行研究の蓄積を十分に踏まえながらも、標準版のメロドラマ概念を日本映画に対して外在的に適用するのではなく、歴史的文化的に特殊な「ローカル・ジャンル」という概念を採用して、日本独自の批評的かつ産業的なカテゴリーとしての「メロドラマ映画」というジャンルが存在していたことを明らかにする企てである。

本論文によれば、日本映画で最初に批評的・産業的カテゴリーとしてのメロドラマ・ジャンルが成立したのは、1930 年代後半の松竹大船撮影所製作の女性向け映画によってであった。『愛染かつら』シリーズ (1938-39 年) を代表とするこの作品群を、本研究は日本のメロドラマ映画の「プロトタイプ」とみなす。戦時期と占領期にはジャンルとしてのまとまりをなさなかったメロドラマ映画は、占領終結後、人気ラジオ・ドラマ『君の名は』を松竹大船が『愛染かつら』以来のメロドラマとして映画化して大ヒットさせたことが契機となって復活した。『君の名は』三部作 (1953-54 年) 以後、1950 年代から 60 年代にかけて他の映画会社もメロドラマを競って製作し、その結果、3つのサブジャンルが形成されることになった。

本論文の中心的な課題は、これら 3つのサブジャンルの具体的な形態を、当時の言説の歴史的調査と作品の批評的分析から浮かび上がらせることにある。

全 6 章からなる本論文の奇数章は、各サブジャンルの同定と概説に充てられている。当時のジャーナリズムの批評と映画会社の宣伝・広告の言説の調査によって、実際の呼称はつねに同一ではないにしても、また、ジャンル形成の事情は異なるにせよ、それぞれ、「すれ違い映画」(第 1 章)、「文芸メロドラマ」(第 3 章)、「リバイバル・メロドラマ」(第 5 章) という代表的なキーワードのもとに分類できる 3つの集合が識別された。これらのジャンルの映画史的位置、歴史的背景、受容の過程や作品の傾向などが概説されると共に、それ

それぞれのジャンルに関連する諸問題が指摘された。すなわち、すれ違い映画においては敗戦後日本が失った領土への郷愁や芸術と大衆の関係をめぐる批評的論争、文芸メロドラマにおいては同時代における姦通を主題とした中間小説との関係と女性向け作品に対する男性批評家たちの道徳的抵抗、リバイバル・メロドラマにおいては、テレビの普及による映画産業の衰退が始まった時期に、他のメディアと連動して物語世界以外の情報を搾取するゴシップ的快樂の追求である。

偶数章は、各サブジャンルから特別な映画を1本ずつ取り上げてテキスト分析を行なう。本論文は、これらの映画を「範例的作品」と呼んでいる。範例的作品とは、単にローカル・ジャンルの典型であるだけでなく、グローバルに適用されてきた標準版メロドラマと主題や様式の点で関連する特性を備える傑出した作品を意味する。その特性として本論文が最も注目したのは、標準版メロドラマの重要な構成契機とみなされてきた様々な二元的葛藤である。そのメロドラマ的葛藤は、すれ違い映画の『君の名は』では宙づりの快樂という倒錯した様態で敗戦後の日本国民の心性と結びつき(第2章)、文芸メロドラマの『獵銃』(1961年)では、洗練されたスタイルを通じて性的権力に対する女性的身体の抵抗を表象し(第4章)、リバイバル・メロドラマの『続・愛染かつら』(1962年)では、古い物語を新しい時代設定で語ることの自己言及的な矛盾を提起するものとされる(第6章)。

さらに本論文の重要な特徴として見逃せないのは、本論文が同定してその形態を描き出したジャンルが従来の日本映画史から無視されてきたその理由も示唆していることである。特に文芸メロドラマの場合は、女性向け大衆娯楽映画であり性的欲望の主体としての女性に焦点化していたがゆえに男性批評家の道徳的抵抗によって否定的に扱われたというジェンダーの力学が批判的に論じられている。

## (2) 論文の評価

本申請論文は、日本映画の独自のジャンルとしての「メロドラマ」を対象とした初めての本格的な実証研究の試みである。英語圏の映画研究の標準的な概念を日本映画に適用するのではなく、ジャーナリズムの批評的言説と映画会社の宣伝・広告の言説の調査から、一定期間にわたって特定のまとまりをなす——本論文の表現では1個の「身体」をなす——ジャンルとしてのメロドラマの歴史的な存在とその形態を明らかにしようとした野心的な企てである。この課題に対して本論文は、ローカル・ジャンルの概念を導入することによって対象の特性を明確に規定した上で、言説の網羅的な調査と作品の緻密なテキスト分析によって、「すれ違い映画」、「文芸メロドラマ」、「リバイバル・メロドラマ」という3つのサブジャンルとそれに帰属する作品群を同定することに成功した。このことは日本映画の研究への大きな貢献として高く評価できる。各ジャンルに関する歴史記述の章と作品分析の章を組み合わせるという構成も周到に練られたものであり、本論文全体の説得性を高めるのに役立っている。



言説の調査においては、ジャーナリズムで（しばしば蔑称として）用いられた呼称と映画会社によって商品管理された特定の作品の集合との対応関係を確立するという手法で、従来の映画史が見逃してきたジャンルの歴史的な存在を説得的に論証した。同時に、両者の相互作用から、そのジャンルを支えたファンダムの存在も示唆した。さらに、それぞれのサブジャンルの歴史的社会的特性を対象に即して分析することで、その独特な形態を明確に示してみせた。今後、日本映画のメロドラマに関する研究は本論文が同定した3つのサブジャンルの存在を無視することはできないだろうし、日本映画史の記述も本論文の発見を避けて通ることはできないに違いない。さらに、メロドラマ・ジャンルの歴史的な存在を隠蔽してきた批評的要因に関する本論文の批判的考察は、映画批評におけるジェンダーの力学に関する議論に対して重要な視座を提供するものである。

作品の分析においては、範例的作品という概念を設定し、その精緻なテキスト分析によってこの概念の有効性を具体的に証明した。特に範例的作品におけるメロドラマ的葛藤の諸相に注目することによって、本論文はメロドラマというジャンルの特殊と普遍の関係に新たな光を当てることができた。のみならず、個々の作品分析は緻密さと大胆さを兼ね備え、批評としての固有の価値を持っている。作家性の乏しい低俗な映画作品とみなされ、まともに論じられることのなかった『君の名は』シリーズに、ジャンルと密接に関連した倒錯的特性が映画的に表現されていることを解明した分析は画期的であり、ともすれば作家論的批評に傾きがちな作品分析の方法に関して新たな可能性を示した。また、『猟銃』に対する繊細なテキスト分析によって、これまで不当に軽視されてきた戦後の五所平之助の高度に洗練されたスタイルを明らかにしたのも批評上の貴重な業績である。さらに『続・愛染かつら』の時間性を論じた第6章は、撮影所時代の映画とメロドラマの終焉に関する鋭い考察を含み、本論の最後の章にふさわしい内容となっている。

結論で総括されているように、本論文は、これまで見過ごされてきたジャンルの存在を、作品の集合、それを生み出すスタジオ・システム、それを支えるファンダムなどによって構成される「身体」として同定した。また、女優の身振りや姿態への繊細で冷徹な批評的まなざしによって、画面上の女性の「からだ」がジャンルのコードに対して従属したり抵抗したりする複雑な様態を鮮やかに示した。さらに、技術と表現様式の周到な分析によって、映画作品自体の「身体」をなまなましく触知している。こうして、映画に関連した「身体」概念の多角的な有効性を論述の実践によって示したことも、本論文の大きな功績と言える。

公開審査会においては問題点や不十分な点も指摘された。もっぱらジャンルの同定や形態の解明に専念した結果、ジャンルと作品における生成や構造の問題に対してはいくぶん目配りを欠いたこと、歴史的背景や同時代の社会的現実との関連が必ずしも十分に論じられていないこと、特に現実の観客の捉え方については理論的にも実証的にも掘り下げる余地がまだ残されていること、既存の理論や概念を利用する際の論述への接続の仕方にとりどころごちない点が見られること、文章表現の粗さや表記の不備がやや目につくこと

などである。しかし、これらの点は、その幾つかは今後の研究の課題とみなすことができるものであり、日本映画の研究に対する本論文の学問的貢献を本質的に損なうものではないことが最終的に確認された。

従って、本審査委員会は、全員一致で、本論文を博士の学位を授与するのにふさわしいものとして認定する。